

インタビュー●

オリンピックピックの歴史と東京五輪

石坂友司・奈良女子大学研究院生活環境科学系准教授

開催まで一年を切った東京オリンピックをまえに、近代オリンピックがどのような意図でスタートしたどのような変遷を経て、今に至っているのか、その歴史と東京で開催する意義を考える。

理想を掲げた近代オリンピック

東京オリンピックまで一年を切りました。開催都市の自治体が中心になるとはいえ、国の支援があったり、近年では商業主義化で私企業のスポンサーもつくなど、公私の区別もわかりにくいのですが、どのような曲折を経て現状があるのでしょうか。

石坂 近代オリンピックは、一八九六年にアテネで第一回が開催されたのはじ

まりです。フランス人のクーベルタンが古代ギリシャの都市国家（ポリス）で行われていた「ゲームズ」という競技を参考にして作ったと言われています。競技はたかさんのポリスで行われていたのですが、なかでも「オリンピア」というポリスのものが一番記録も残っていて参考になったので「オリンピック」という名称になったと言われています。

近代オリンピックのような競技会をやるというアイデアを持っていた人は、

思いますし、かつてはオリンピックにはアマチュアしか参加できなかったことを記憶している方も多いでしょう。

ただクーベルタンの提唱した「アマチュアリズム」は日本でイメージされるようなものとはちよつと違っていて、イギ

リスで労働者階級がスポーツに参入するようになってきた当時、もともとスポーツに親しんでいた貴族階級が労働者階級を排除するような意味合いも含めて「アマチュアリズム」を唱えました。当時はスポーツでは圧倒的に強かったイギリスを近代オリンピックに誘い込むために「アマチュアリズム」の概念を掲げざるを得なかったとクーベルタンはのちに書いています。

変質していくオリンピック

石坂 そうしてはじまった近代オリンピックですが、回を重ねるごとに、当初の理想から離れていくように変化をしていきます。まず近代オリンピックがはじまった一九〇〇年頃というのは、世界各地でナショナルリズムが高揚してい

く時代でもありました。当初



いしざか・ゆうじ●一九七六年北海道生まれ。筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学。博士（体育科学）。専門はスポーツ社会学、歴史社会学。著書に『現代オリンピックの発展と危機』(2020)、「一度目の東京を目指すもの」(人文書院)、『オリンピックの遺産』の社会学「長野オリンピックとその後の10年」(青弓社、共編著)、『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』(青弓社、共編著)など。

当時少なくなかったのですが、クーベルタンが優れていたのは、そこに理想や教育の概念を持ち込んだところにあります。古代ギリシャのポリスは紛争状態にあることも多かったのですが、「ゲームズ」の期間中は休戦状態にしていました。そういう平和の概念を継承して、四年に一度は「オリンピック休戦」として戦争・紛争を一旦は休止してスポーツを通じて友好を育み、また単にスポーツで体を鍛えるだけではなく、道徳や知識とあわせて知・徳・体を育んでいこうといった理想を掲げてスタートしたものですね。

それからもうひとつ、クーベルタンがオリンピックの柱にすえたのは「アマチュアリズム」という概念です。最近の学生はアマチュアとはプロになれなかった下手な人を指すと理解しているようなので困るのですが、日本で一定の年齢以上の方なら「お金のためではなく、純粋にスポーツそのものに取り組む」のがアマチュアだというイメージを持っていると

は選手が個人として参加をするというのが基本だったオリンピックですが、一九〇八年のロンドン大会の頃には、参加国がメダルを争って国の威信をかけてたか、国旗を持って入場したり、勝った時には国歌を歌うといったこともはじまっていて、一九二〇年以降は、オリンピックで獲得したメダルの数が、戦争以外で国の優劣をあらわす指標のようになってしまつて各国が国家予算をつぎ込むというようになっていくんですね。

一九三〇年代に入るとオリンピックは巨大化していきます。三二年のロサンゼルス大会は民間の資金だけを使って既存施設などを使いながらやるという形式でしたが、次の三六年のベルリン大会はご存知のようにヒトラーがナチスの政治的な権力を見せつけるプロパガンダの場に利用されてしまいました。オリンピックを開催するということ自体が、国にとつても非常に重要な要素になってきたのがこの時代で、日本も東京大会に名乗りを